

アラウンド GOGO 55



介護帰省パス

中村尚子

まるで東京駅の改札をくぐ

るのと同じように足早に羽田空港から飛び乗ったANA機は、定刻通り、長崎空港に着陸する。ひと眠りである。午前10時20分、いつものように手荷物もなくゲートを出ようとして、ふと初老の夫婦に目がとまった。孫の姿をいまか、いまかと待っているのだろうか、ガラス越しに手荷物台のあるロビーを見つめていた。

「息子たちの手を引き、荷物を提げて何度ここを通ったことだろう」
そこには、十数年前の父と母の姿があった。

母が「要介護」状態になって3年が経とうとしている。

ちょっととした脚の骨折が最初の入院であった。その後も2回骨折し、心身双方の病も得て、自宅で過ごした時期もあったが、5か所、10回の入院をした。坂を転げるように、とはまさにこのようなことを言うのだな、と実感する。

いま、母は、一日のほとんどすべての時間を老人ホームのベッドで過ごす。

この国には医療や福祉の制度がある。しかし、退院後のケアの限界が見えていても、

退院の準備をするしかない制度である。加えて、制度の知識をもっていったとしても、ど

うにもならない地方都市の、教科書にあるような介護やリハビリなど望めない現実もある。

石畳の坂を上り下りする父の背中、の曲がり具合と足取りも気になりはじめた。

すでに東京で暮らした歲月がふるさとの時間をはるかに超えた私は、短い滞在の最後に、父と兄の前で「東京に帰る」ということを口にする自分に、少し後ろめたさを

感じながら、長崎空港に向かう。東京暮らしを始めてから、とうとう一度も母と隣どうしの席で飛行機に乗ることはなかった。母は家の仕事、私は自分の仕事があったから、というのはいっぱい言い訳かもしれない。

この夏、航空会社2社の「介護帰省パス」を申請した。申請に必要な戸籍抄本に記された母と自分の名前を見つめ、月1回の利用を心に誓う。

(立正大学・全障研副委員長)

*「アラウンド55(ゴーゴー)」は50代をむかえた会員による介護や健康、人生設計などをテーマにした800字のエッセイコーナーです。みなさんからの投稿を募集します。